

バスケットボールをプレーする子どもたちの指導者、親、チームの親集団(応援席)への期待——持続可能な開発(SDGs)と「子どもの権利とスポーツの原則」を実現するため——

藤後 悦子 (東京未来大学こども心理学部)

井梅 由美子 (東京未来大学こども心理学部)

大橋 恵 (東京未来大学こども心理学部)

本研究は、子ども主体のスポーツ環境構築のために、小中学生の子ども達の意見を収集し、その内容を整理することを目的とした。関東を中心として展開している民間のバスケットボールのスクールに通う小中学生332名(男子161名、女子159名)に対して、周囲の大人に「やってほしいこと」、「やってほしくないこと」について自由記述を求めた。KJ法で分類した結果、「やってほしいこと」は29小カテゴリーと9大カテゴリー、「やってほしくないこと」は、41小カテゴリー、11大カテゴリーに分類された。「やってほしくないこと」では、「競技への熱くなりすぎる態度」、「過干渉」、「練習内容への不満」、「暴言・暴力」などが挙げられた。これらを踏まえて、温かい応援を中心とした受容的な環境、対話的スポーツ環境の必要性が議論された。

キーワード：応援席ハラスメント、スポーツの親子関係、SDGs、子どもの権利とスポーツの原則

1. 問題と目的

2015年9月にニューヨークで開催された国連「持続可能な開発サミット」(Transforming Our World: the 2030 Agenda for Sustainable Development)で、2030年までの15年間に世界共通の目標として、17のゴールと169のターゲットから構成される「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals: SDGs)」が策定された(United Nations, 2015)。その中で、「スポーツもまた、持続可能な開発における重要な鍵となるものである。我々は、スポーツが寛容性と尊厳を促進することによる、開発および平和への寄与、また、健康、教育、社会包摂的目標への貢献と同様、女性や若者、個人やコミュニティの能力強化に寄与することを認識する。」(国際広報センター, 2016)と述べられており、スポーツは持続的な開発における重要な要素であることが明示された。東京2020オリンピック・パラリンピックを控える日本は、持続可能な開発目標達成に向けて「スポーツを楽しめる世界を次の世代へ」と掲げ積極的にスポーツ環境を整えつつある。

上記の流れを踏まえスポーツ庁では、2018年3月に「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」(スポーツ庁, 2018)を策定し、その実施の徹底を呼び掛けている。また地域スポーツにおいては、地域総合型スポーツを中心に、従来の勝利至上主義にもとづく競技力向上を目的としたものから、生涯

スポーツの発展を重視したパラダイムの転換が期待されている。さらに、2018年11月20日には、ユニセフ(国連児童基金)と日本ユニセフ協会によって、「子どもの権利とスポーツの原則」(公益財団法人日本ユニセフ協会, 2018)が発表された。これは、スポーツと子どもの課題を関連付け、子どもの成長や権利の促進を目的とした世界初の内容である。本原則では、スポーツに関わる全ての人の行動指針を示しており、その内容は次の10の項目となっている。すなわち「1. 子どもの権利と尊重にコミットする、2. スポーツを通じた子どものバランスのとれた成長に配慮する、3. 子どもをスポーツに関係したリスクから保護する、4. 子どもの健康を守る、5. 子どもの権利を守るためのガバナンス体制を整備する、6. 子どもに関わるおとなの理解とエンゲージメントを推進する、7. スポーツ団体への支援の意思決定において子どもの権利を組み込む、8. 支援先のスポーツ団体に対して働きかける、9. 関係者への働きかけと対話を行う、10. スポーツを通じた子どもの健全な成長をサポートする」である。

それでは、日本の子どもたちのスポーツの現状は「子どもの権利とスポーツの原則」を実現できているのであろうか。残念ながら、道のり半ばと言わざるを得ない。2019年に入ってから全国優勝経験のある兵庫県の高校バレーボール部で平手打ちされた生徒が鼓膜を損傷し(信毎Web, 2019)、茨城県でも卓球部顧問が「殺すぞ」などの暴言を吐き、中学生

が自殺する（産経新聞，2019）など悲惨な事件が相次いでいる。このようなスポーツ現場における体罰は、指導者のみの問題ではなく、それを容認する親やチームの親集団（応援席）の存在も関係する。藤後・大橋・井梅（2017）は、精神的な体罰や過度な負荷を含めたスポーツの場における不適切な行動や嫌がらせをスポーツ・ハラスメントとし、指導者、親、チームの親集団（応援席）や選手もスポーツ・ハラスメントの加害者、容認者、観衆者になりえることを指摘した。指導者、親、チームの親集団（応援席）の不適切な対応は連動しており、指導者やチームの親集団（応援席）からの不適切な対応があると、親はより支配的に子どもに接するようになり、その結果、子どもは神経症的な症状を強めるのであった（藤後・川田・井梅・大橋，2017）。

日本の教育現場における体罰への問題提起は、国連子ども権利委員会からもなされている。2019年2月に提出された国連子ども権利委員会からの勧告書には、項目25（a）で「学校における禁止が実効的に実施されていないこと」、項目26（b）で「～あらゆる状況において現に行われている体罰を根絶するための措置を強化すること」などが勧告されている。さらに、当該委員会は、教育を含めたすべての分野において子どもによる意見表明権が保障されていないことを指摘し、意見表明を可能にする環境の提供が勧告された（子どもの権利条約NGOレポート連絡会議，2019；ADVANCE UNEDITED VERSION，2019）。子どもの発達や成長を見通したスポーツ環境を構築するためには、まずは子どもの意見に耳を傾ける必要がある。今回の国連子ども権利委員会が指摘した子ども自身の意見表明は、より良いスポーツ環境構築への子ども自身の参画への第一歩となろう。

そこで本研究は、子どものスポーツの人的環境である指導者、親、チームの親集団（応援席）に対する子どもたちの意見を収集しその内容を明らかにすることを目的とした。

なお、調査対象のスポーツの選定にあたり、本研究では以下のように考えた。まず、チームスポーツは試合当番などがあるため、親の関与が高く、試合の応援もより多くの親達に参加する。子どもとチームの親達は物理的に過ごす時間が長く、チームの親達への期待が明確になりやすい。さらに、数あるチームスポーツの中で男女ともに参加率が高い種目として、

本研究では少年団で3番目に登録団員数の多いバスケットボール（日本スポーツ協会，2019）を取り上げることとした。

II. 方法

1) 回答者と調査時期

関東を中心として展開している民間のバスケットボールのスクールに通う小中学生332名（男子161名、女子159名、無回答12名）に調査を依頼した。内訳は、小学1年生1名、2年生1名、3年生10名、4年生39名、5年生59名、6年生72名、中学1年生49名、2年生58名、3年生38名、高校1年生1名、2年生1名であった。

調査期間は、2017年11月～12月であった。

2) 調査方法

スクールの責任者を通して依頼し、封筒を厳封したうえでスクールの責任者への返却を求めた。

3) 調査内容

まず、競技レベル、継続年数、練習日数、継続意志などを尋ねた。さらに、スポーツ一般や勉強等に対する自信に関する7項目（6件法）を尋ね、最後に、親/指導者/チームメイト/チームの親集団（応援席）に対する期待（「やってほしいこと」、「やってほしくないこと」）について自由記述による回答を求めた。当該スクールに通う子どもたちは、基本的に地域スポーツや部活動などでの活動を主としている。そのため、本調査における「指導者」とは、スクールの指導者ではなく、主に彼らが所属するチームの指導者を想定してもらった。

スポーツ一般や勉強等に対する自信、及びチームメイトへの期待については本研究では分析対象外とし、「バスケットをやっていると楽しいですか」と「失敗するのではないかといつも不安ですか」の2項目のみ取り上げた。

4) 倫理的配慮

事前に本学の研究倫理委員会の承認を得て実施した。倫理的配慮として、この調査は自由意志であること、データは厳重に保管すること、学術的な利用のみ行うことを文書及びスクール責任者から口頭にて説明し同意を得た。

Ⅲ. 結果

1) 基礎統計

本研究は、子どもたちが地域で主に所属するチーム（地域スポーツまたは部活動）での実態を明らかにすることを目的とするため、地域スポーツや部活動に所属していない23名を除外した。また、発達年齢による違いを明らかにするために、スポーツ活動が盛んになる小学生中学年から中学生までを対象にすることとした。そこで小学2年生1名、高校生2名、無回答3名を除外することとし、合計29名を除外した303名を分析対象とした。

子どもの発達年齢による特徴を分析するために小学3年生と4年生を小学生中学年、小学5年生と6年生を小学生高学年、中学1年生から3年生までを中学生とした。分析対象者の内訳は小学生中学年43名（14.2%）、小学生高学年118名（38.9%）、中学生142名（46.9%）であった。

所属チームの競技レベルは、全国大会レベル17名（5.6%）、関東大会レベル16名（5.3%）、都大会レベル41名（13.5%）、地区大会上位レベル60名（19.8%）、地区大会中位レベル77名（25.4%）、それ以下75名（24.8%）、無回答17名（5.6%）であった。

個人の競技レベルは、レギュラー200名（66.0%）、準レギュラー61名（20.1%）、補欠27名（8.9%）、無回答15名（5.0%）であった。

「バスケットをやっていて楽しいですか」の質問では、いいえ1名（0.3%）、ややいいえ3名（1.0%）、どちらかといえばいいえ7名（2.3%）、どちらかといえばはい9名（3.0%）、ややはい26名（8.6%）、はい255名（84.1%）、無回答2名（0.7%）であった。どちらかといえばはい、ややはい、はいを合計すると95.7%がバスケットを好きでプレーしている様子が明らかになった。

「失敗するのではないかと、いつも不安ですか」の問いに対しては、いいえ47名（15.5%）、ややいいえ63名（20.8%）、どちらかといえばいいえ56名（18.5%）、どちらかといえばはい57名（18.8%）、ややはい37名（12.2%）、はい39名（12.9%）、無回答4名（1.3%）であった。どちらかといえばはい、ややはい、はいを合計すると43.9%の子どもたちが、失敗するのではないかと常に心配しながらプレーしている

様相が示された。

2) 子どもが大人に「やってほしいこと」の概要

指導者、親、チームの親集団（応援席）に対して子どもたちが「やってほしいこと」と回答した自由記述のエピソードを分析対象とした。なお無回答は、対指導者29名（9.6%）、対親36名（11.9%）、対チームの親集団（応援席）32名（10.5%）でありこれらを分析から除外した。

はじめにジュニア期のスポーツを研究し、臨床心理学を専門としている2名の大学教員と社会心理学を専門としている1名の大学教員の3名により自由記述のエピソードをKJ法により分類した。その結果、子どもが大人に「やってほしいこと」は、29の小カテゴリーと9つの大カテゴリーに分類された。その中の【なし】【わからない】へ分類された者、具体的には、対指導者56名（18.5%）、対親72名（23.8%）、対チームの親集団（応援席）92名（30.4%）を各分析から省いた。最終的に【なし】【わからない】の2つの大カテゴリーを除いた29の小カテゴリーと7つの大カテゴリーの内容に分けて分析した。本調査303名の中の有効回答数は、対指導者218名（71.9%）、対親195名（64.3%）、対チームの親集団（応援席）179名（59.1%）であった。以下、各対象者別の有効回答者数を基準とした回答者数及び百分率をTable 1の全体の欄に記載した。各対象者別のカテゴリーの中で発達の特徴を記載する際は、発達区分で分けた人数を基準とした百分率を記載した。

子どもが大人へ「やってほしいこと」を検討した結果、指導者に「やってほしいこと」は【具体的なアドバイスや練習方法の工夫】の148名（67.9%）が最も多く、【物理的サポート】34名（15.6%）、【精神的サポート】22名（10.1%）が続いた。

親に「やってほしいこと」は、【精神的サポート】が86名（44.1%）と最も高く、次に【物理的サポート】が61名（31.3%）、【具体的なアドバイスや練習方法の工夫】が43名（22.1%）であった。チームの親集団（応援席）には、温かい応援などの【精神的サポート】が118名（65.9%）と最も多く、続いて【チームの円滑な運営へのサポート】22名（12.3%）、【具体的なアドバイスや練習方法の工夫】22名（12.3%）が同数であった。

発達年齢の特徴としては、小学生中学年、小学生

【精神的サポート】

子どもは、親やチームの親集団（応援席）には、精神的サポートを最も「やってほしいこと」と考えていた。特にチームの親集団（応援席）に対しては、＜肯定的な応援＞としての「温かい応援や拍手」を期待している。同時に「熱すぎない応援」や「プレッシャーのない応援」を望んでいた。また、「いっぱい褒めてほしい」というように＜ポジティブな対応＞を求めており、時には＜受容的な態度＞で「話を聞いてもらおう」ことを望んでいる。指導者に対しては＜平等に接してほしい＞と思い、指導者、親、チームの親集団（応援席）すべてに対しては＜すぐに怒らないでほしい＞と願っている。

【具体的なアドバイスや練習方法の工夫】

指導者に対しては、指導方法への期待が高く、＜応用メニューやスキルメニュー＞として、「シュート練習」、「試合の場面との関連」を求めている。また練習メニューも「新しい技術を教えてほしい」など＜新しい内容やメニューの工夫＞や「丁寧に教えてほしい」という＜分かりやすさ＞を希望していた。加え「基礎練習を教えてほしい」という＜基礎練習＞に関する要望や＜練習試合を増やす＞こと、そして＜考えさせる教え方をしてほしい＞との要望が挙がった。

また指導者のみでなく、親やチームの親集団（応援席）に対しても「細かいところを教えてほしい」等の＜アドバイス＞を求めており、親に対しては＜練習相手希望＞も挙がった。

【物理的サポート】

物理的サポートへの期待はチームの親集団（応援席）へは少なく、親に対して最も多かった。その内容は、＜送迎＞であり、特にスクールは練習場所が遠かったり、夜の時間帯の練習であったりすることも多いため、「送り迎えをしてほしい」との要望が多く、続いて、「体育館を予約してほしい」などの＜自主練の環境整備＞を期待していた。また＜金銭的サポート＞として「バスケット関連の物を買ってほしい」と指導者と親に求めていた。その他にも＜マッサージ＞をしてもらいたい、「お弁当作り」などの＜栄養的サポート＞、「ずっとバスケットをやらせてほしい」という＜継続希望＞、そして親やチームの親集団（応援席）に対しては、＜応援に来てほしい＞、＜練習を見に来てほしい＞というリクエストも示された。

【適度な距離感】

親に対してのみであったが、＜試合に来ないでほしい＞との記述も示された。

【自分の子どもへのサポート】

子どもたちは、チームの親集団（応援席）やパパコーチ・ママコーチには、自身の子どもを「練習にきちんと出させる」ことや「自分の子どもをまず褒めて」と＜自身の子どもの世話＞を望んでおり、＜お弁当づくりや家のこと＞もきちんとするようにチームの親集団（応援席）に対しては期待していた。

【チームの円滑な運営へのサポート】

チームの親集団（応援席）に対しては、「チームの手伝い」、「体育館確保」など＜チームへの肯定的な協力＞を求めている。また子どもたち同士で解決しにくい場面であるケンカや度が過ぎるふざけに対しては「練習でふざけている人がいたら、注意してほしい」、「子どもたちのケンカをちゃんと止めてほしい」と＜子どもたちへの指導や見守り＞への希望が多かった。また楽しいこととして「クリスマスなどのイベントをやってもらいたい」など、＜イベント開催＞の希望もみられた。そして大人として「親も仲良く」など＜良好な対人関係＞への要望や、「監督を落ち着かせてほしい」、「先生の理不尽な所を見張ってほしい」など＜監督への対応＞を望んでいる様子もうかがえた。

4) 子どもが大人に「やってほしくないこと」の概要

はじめに、各対象への無回答者、具体的には対指導者40名（13.2%）、対親40名（13.2%）、対チームの親集団（応援席）51名（16.8%）を除き、子どもが大人に「やってほしくないこと」に関する自由記述を前述と同様に大学教員3名でKJ法にて分類した。その結果、子どもが大人に「やってほしくないこと」は、41小カテゴリー、11大カテゴリーに分類された。さらに大カテゴリーに分類された【なし等】【わからない】と回答した対指導者129名（42.6%）、対親138名（45.5%）、対チームの親集団（応援席）141名（46.6%）を分析から除外し、41小カテゴリー、9大カテゴリーを分析対象とした。最終的に本分析の有効回答者は、対指導者134名（44.2%）、対親125名（41.3%）、対チームの親集団（応援席）111名（36.6%）となった。以下、各対象者別の有効回答者数を基準とした回答者数及び百分率を記載した。なお発達の特徴を記載する際は、発達区分で分けた人

数を基準とした百分率を記載した (Table 2)。

まず、全体を概観すると、指導者に対しては、【練習内容への不満】が51名 (38.1%) と最も多く、続いて【暴言・暴力】46名 (34.3%) となった。親に対しては【過干渉・支配的】が46名 (36.8%) と最も多く、【ネガティブな態度・言動】が44名 (35.2%)、【無関心・非協力】が13名 (10.4%) と続いた。チームの親集団 (応援席) には、【競技への熱くなりすぎる態度】27名 (24.3%) が最も多く、続いて【ネガティブな態度・言動】20名 (18.0%)、【大人としての不適切さ】18名 (16.2%) が示された。

発達的な特徴を見てみると、指導者にはすべての年齢で約3割が【暴言・暴力】に対して不快感を示していた。中学生では【無関心・非協力】への不満が13.3%挙がったが、小学生高学年では0%であった。

【大人としての不適切さ】は、中学生が最も意識していた。【練習内容への不満】はすべての年代において3割以上が不満を示していたが、その中でも小学生高学年は43.6%と高かった。

親に「やってほしくないこと」としては、中学生では【過干渉・支配的】が44.4%と高かったが、小学生中学年では5.9%と低かった。【ネガティブな態度・言動】は小学生中学年では47.1%と高かった。【暴言・暴力】も小学生中学年が17.6%と高く、小学生高学年は0%、中学生は4.8%と低かった。チームの親集団 (応援席) に「やってほしくないこと」は、【過干渉・支配的】が小学生高学年で22.5%と最も多かった。中学生では、【競技への熱くなりすぎる態度】が28.1%、【大人としての不適切さ】が15.8%、【暴言・暴力】が12.3%となった。

Table 2 指導者、親、チームの親集団 (応援席) に「やってほしくないこと」

大カテゴリー	小カテゴリー	指導者				親				チームの親集団 (応援席)			
		小学生 中学年 n=19	小学生 高学年 n=55	中学生 n=60	全体 n=134	小学生 中学年 n=17	小学生 高学年 n=45	中学生 n=63	全体 n=125	小学生 中学年 n=14	小学生 高学年 n=40	中学生 n=57	全体 n=111
1. 過干渉・支配的	過干渉、行き過ぎた指導や介入、プライベートへの口出し、活動制限、余計な心配、不必要な声かけ、勉強を持ち出す、失敗を許さない雰囲気、話や説教が長い、過度な要求や支配的態度、干渉されたくない	0 (0.0%)	3 (5.5%)	0 (0.0%)	3 (2.2%)	1 (5.9%)	17 (37.8%)	28 (44.4%)	46 (36.8%)	0 (0.0%)	9 (22.5%)	8 (14.0%)	17 (15.3%)
2. ネガティブな態度・言動	ネガティブな発言、ネガティブな非言語的行動、プレッシャー的な発言、比較する	2 (10.5%)	4 (7.3%)	4 (6.7%)	10 (7.5%)	8 (47.1%)	18 (40.0%)	18 (28.6%)	44 (35.2%)	3 (21.4%)	8 (20.0%)	9 (15.8%)	20 (18.0%)
3. 無関心・非協力	無関心・応援しないこと、非協力的態度、環境の悪さ	1 (5.3%)	0 (0.0%)	8 (13.3%)	9 (6.7%)	2 (11.8%)	6 (13.3%)	5 (7.9%)	13 (10.4%)	2 (14.3%)	2 (5.0%)	4 (7.0%)	8 (7.2%)
4. 競技への熱くなりすぎる態度	審判や相手チームへの批判/必要以上の大騒ぎ・無礼さ、プレーへの批判、コーチと異なる指導、必要以上の大騒ぎ	2 (10.5%)	4 (7.3%)	3 (5.0%)	9 (6.7%)	1 (5.9%)	2 (4.4%)	5 (7.9%)	8 (6.4%)	3 (21.4%)	8 (20.0%)	16 (28.1%)	27 (24.3%)
5. 暴言・暴力	暴言・罵声、暴力	7 (36.8%)	18 (32.7%)	21 (35.0%)	46 (34.3%)	3 (17.6%)	0 (0.0%)	3 (4.8%)	6 (4.8%)	1 (7.1%)	4 (10.0%)	7 (12.3%)	12 (10.8%)
6. 大人としての不適切さ	情報の流出、礼儀がない、遅刻、親同士の不仲、不平等な扱い、無視、たばこ、自分勝手な行動/大人げないこと	0 (0.0%)	2 (3.6%)	4 (6.7%)	6 (4.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (1.6%)	1 (0.8%)	3 (21.4%)	6 (15.0%)	9 (15.8%)	18 (16.2%)
7. 自分の子どもへのサポート不足	自分の子どもへの不適切な対応	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (7.1%)	1 (2.5%)	3 (5.3%)	5 (4.5%)
8. 練習内容への不満	練習内容や指導内容への不満、連帯責任、プレーや試合出場制限、レギュラー選抜基準の不透明さ、コーチ間の連携不足、ひいき	7 (36.8%)	24 (43.6%)	20 (33.3%)	51 (38.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
9. その他	甘やかす、その他	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (11.8%)	2 (4.4%)	3 (4.8%)	7 (5.6%)	1 (7.1%)	2 (5.0%)	1 (1.8%)	4 (3.6%)
合計		19 (100.0%)	55 (100.0%)	60 (100.0%)	134 (100.0%)	17 (100.0%)	45 (100.0%)	63 (100.0%)	125 (100.0%)	14 (100.0%)	40 (100.0%)	57 (100.0%)	111 (100.0%)

5) 子どもが大人に「やってほしくないこと」の

ストーリーライン

以下、分類された自由記述もとに、ストーリーラインを作成した。

【過干渉・支配的】

指導者に対しては、「出来ないことに暴言ばかり言ってくる」などの＜失敗を許さない雰囲気＞や＜話や説教が長い＞ことに嫌悪感を示していた。

親やチームの親集団（応援席）に対しては、＜過干渉＞の内容が最も多く、「これしなさい、あれしなさいと言われたくない」や「なってほしい選手像を押し付けられないでほしい」、「自分が分からないことをどんどん言ってくること」など＜過度な要求や支配的態度＞に息苦しさを感じていた。

またチームの親集団（応援席）に対しては、プレーに関する＜行き過ぎた指導や介入＞に不満を感じ、「審判に対して文句を言ってもらいたくない」、「相手チームの批判はしてほしくない」などと思い、「バスケット関係ない口出し」などの＜プライベートへの口出し＞は控えてほしいと思っている。親に対しては「プレーへの文句」など＜干渉されたくない＞気持ちが強い。親の態度としては、「勉強のことを言う」など＜勉強を持ち出す＞ことや、「バスケットをやんな」、「バスケットをやめたら」、「部活をやめさせようとする」と＜活動制限＞をかけてくることをやめてほしいと思っている。「フリースローの時に声をかけられる」ことは＜不必要な声かけ＞と感じ、必要以上に「心配」をしてくることを子どもたちは＜余計な心配＞と感じている。

【ネガティブな態度・言動】

＜ネガティブな発言＞は、親やチームの親集団（応援席）に対して特にやめてほしいと思っており、「ビデオをみてすぐに文句を言わないでほしい」、「自分の悪口を人前で言わないでほしい」、「チームへの悪口を言われる」などのコメントが示された。さらに＜ネガティブな非言語的行動＞に対して拒否的な反応を示しており、「失敗した時にため息をつくのはやめてほしい」などと記されていた。チームの親集団（応援席）に対しても同様に「試合の時文句ばかり言ってくる」、「試合中のディスリ」、「嫌がらせや中傷」に対して不満がたまっている。親は、練習や試合中に撮ったビデオを見て子どもたちに助言をするが、子どもたちは「家に帰ってきて、とってもらったビデオを見て文句を言う」、「ダメ出しはやめてほしい」と＜プレッ

シャー的な発言＞に嫌気がさしている。

また、子どもたちは大人が＜比較する＞ことに敏感で、「妹もバスケットしているけど、『お前が3年のころより全然いいよ』とくらべてほしくない」、「人と比較してほしくない」と思っている。

【無関心・非協力】

子どもたちは、大人の「チームの手伝いをしない」、「応援に来ないこと」などの＜無関心・応援しないこと＞、＜非協力的態度＞はやめてほしいと思っており、「送り迎え」などをしてもらえない＜環境の悪さ＞は嫌だと思っている。

【競技への熱くなりすぎる態度】

チームの親集団（応援席）と親に共通して、応援に来てくれるのは嬉しいが、「審判に対して文句を言ってもらいたくない」というように、＜審判や相手チームへの批判/必要以上の大騒ぎ・無礼さ＞はやめてほしいと思っている。さらに、「プレーへのブーイング（個別で）」や「試合中、プレーについていわれること」などの＜プレーへの批判＞や「監督が言ったことと、違うことを言われる」などの＜コーチと異なる指導＞や＜必要以上の大騒ぎ＞もやめてほしいと思っている。

【暴言・暴力】

暴言・暴力に関しては多くのコメントが示された。子どもたちは、『バカ!』などと言わないでほしい」、「暴言を言わないでほしい」、「帰れ!などと言わないでほしい」、「理不尽に怒らないでほしい」、「激怒すること」、「ベンチからの暴言」、「試合中に怒鳴らないでほしい」と＜暴言・罵声＞はやめてほしいと強く思っている。またシンプルに＜暴力＞との記載や「暴力はやめてほしい」とのコメントもあった。

【大人としての不適切さ】

親やチームの親集団（応援席）に「やってほしくないこと」は、「親たち同士、陰でいろいろな情報を回さないでほしい」などの＜情報の流出＞である。また「観客席でマナーを守ること」、「態度の悪い姿を見せること」、「足を組んだりしてほしくない」、「コーチの話の時には、話をやめてほしい」など大人としての＜礼儀がない＞ことや＜遅刻＞に対しても不愉快さを示している。そして＜不平等な扱い＞に関連する「差別」、「じゃまものあつかい」や＜無視＞という声も挙がった。

また、「親たちでのめごとはやめてほしい」、「親

たちの中での悪口」などの＜親同士の不仲＞や試合会場などでの＜たばこ＞など＜自分勝手な行動/大人げないこと＞や「自由な行動。例えば、練習中に自分のシューティングする」ことは控えてほしいと思っている。

【自分の子どもへのサポート不足】

子どもたちは、親たちに対して「自分の子どもへの不適切な対応やさばり」、「自分の子どもがいじめているのに何もしないこと」、「親たちの子どもがうるさいからやめてほしい」、「自分の子どもをかばう言動。八つ当たり」など、＜自分の子どもへの不適切な対応＞をやめてほしいと思っており、我が子中心の態度を改め、自身の子どもをしっかりと見てほしいという要望が強かった。

【練習内容への不満】

指導者に対しては、練習内容への不満が様々に示された。例えば、＜練習内容や指導内容への不満＞として、「ボールに触る練習をさせてくれない」、「毎回同じメニュー」、「ペナルティをやらされること」、「説明をせずに練習をすること」、「ずっとだらだら走らせる」、「口だけの説明で練習をすすめないでほしい」という内容や、「連帯責任のペナルティ」、「連帯責任の幅が広すぎ」などの＜連帯責任＞への不満、「試合に出られなくなる」などの＜プレーや試合出場の制限＞や「身長のみで判断すること」による＜レギュラー選抜の基準の不透明さ＞への不満も示された。そして、「コーチによって言うことが違う」という＜コーチ間の連携不足＞や「えこひいき」、「人によって態度をかえる」、「差別」、「お気に入りを作らないでほしい」などの＜ひいき＞に関しては、敏感であった。

【その他】

その他としては、「心配」、「疲れているからと言って甘やかすこと」、「自分でやることはやらせてほしい」など＜甘やかす＞に関することも示された。

IV. 考察

本研究では、子どもの権利条約や持続可能な開発の視点から、子ども中心のより良いスポーツ環境を構築する第一歩として、スポーツを行う子どもたちの意見を収集し、その内容を整理した。

はじめに本対象になった子どもたちの概要である

が、地域スポーツや部活動に所属しながらスクールに通っている子どもたちが大半であり、全国大会や関東大会の出場のチームに属している子どもたちも10%いた。チームの中でのレギュラーは66.0%であり、比較的競技レベルが高い。またバスケットボールを96.3%が好きと答えており、モチベーションの高い子どもたちであった。一方で、失敗に対する不安は高く、レギュラーでかつ運動能力が高いにもかかわらず「失敗するのではないかといつも不安」と回答した子どもたちは約半数示された。

子どもたちの不安や神経症的な傾向には、周囲の大人の影響が強いことが示されている（藤後・井梅・大橋, 2017）。そこで大人の影響を確認するために、はじめに子どもたちが大人に「やってほしいこと」の内容を検討した。その結果、子どもたちは、指導者に【具体的なアドバイスや練習方法の工夫】を最も求めていた。チームの親集団（応援席）や親へは【精神的サポート】が最も多く挙がり、温かい応援や受容的な環境を求めていた。その他には【チームの円滑な運営へのサポート】、【具体的なアドバイスや練習の工夫】などが続いた。発達的な特徴としては、中学生では、親に対しては、【精神的サポート】や【物理的サポート】を求めており、小学生ではより【具体的なアドバイスや練習方法の工夫】を期待していた。そしてチームの親たち（応援席）に対しては、小学生高学年では【具体的なアドバイスや練習方法の工夫】を望んでいた。つまり、学年が低い頃は、親やチームの親たち（応援席）にも一緒にプレーしながら教えてほしいという要望が強いが、思春期に入るにつれ、特にチームの親たち（応援席）には【具体的なアドバイスや練習方法の工夫】などは求めておらず、親とともに【精神的サポート】を中心に望んでいた。これは、親ぐるみの地域スポーツから学校中心で行われる部活動に移行すること、思春期の自立意識の高まりと関係するであろう。

一方で、子どもが大人に「やめてほしいこと」は、指導者へは【暴言・暴力】、【練習内容への不満】、チームの親集団（応援席）や親へは【過干渉・支配的】、【ネガティブな態度・言動】、【大人としての不適切な態度】であった。発達的な特徴としては、親に対して中学生は【過干渉・支配的】なことに半数の子どもたちが嫌悪感を示している。また小学生高学年では、チームの親たち（応援席）の【過干渉・支配的】な行

為に対しても否定的であった。地域スポーツでは高学年になると試合数も多くなり、親子一緒に試合に行くことも増える。応援席からの指示や移動中の過干渉的な大人の態度が子どもたちにとって負担と感ずるのである。

スポーツの世界では、指導者のみでなく、親もチームの親集団（応援席）も子どものプレーへの失敗に対して批判的な傾向が強い（永井，2013；島沢，2017）。失敗への過度の叱責や罵声・罵倒は、子どもたちの間でも失敗への批判や下手な子への見下しを引き起こし、場合によっては部内いじめを促進する場合もある（藤後・大橋・井梅，2018）。加え、藤後・井梅他（2017）の調査では、チーム内のハラスメントの雰囲気や行動は親の支配的行動や我が子中心的な行動を促すことが報告されている。つまり子どもは失敗することで、指導者や仲間から批判され、親からも失敗を責められ改善するように求められるのである。結果として子どもたちは自信をなくしたり、無力感に陥ったりする。

これを裏付けるように、中学3年生時に不登校であった生徒に追跡調査をした結果、複数回答ではあるが不登校の原因として約4人に1人（23.1%）が部活動での不適応を挙げている（文部科学省，2014）。子どもの権利条約委員会からも日本の教育分野における「過度な競争」の改善や「安全な環境」の構築などが指摘されており、今回の子どもたちの声を真摯に受け止める必要があろう。

前述の藤後他（2018）の研究では、指導者からのサポートは子どもの部内いじめによる疎外感を低減することを示している。基本的信頼感や安心感は、子どもたちの成長の基礎となるものであり、スポーツの場に関わる大人や仲間からの受容感が増せば、スポーツの場が「居場所」として機能することになる。友達をはじめとした「居場所」の有無は、中学生の精神的健康度の無気力やイライラを抑制することを促し、健康度を高めることが示されている（杉本，2010）。本研究の結果からも、子どもたちは自分たちを受け止め、見守ってくれる環境を求めていることが示された。

その他にも指導者に対しては、指導の工夫を求めていることも明らかになった。指導者の支配的な態度は、子どもたちの指導者に対する意見表明を妨げる。一方で、指導者の支援的行動と運動部員のバーンア

ウト傾向を検討した結果、練習内容について部員の意見を聞くという指導者の支援的行動は、生徒の自律性の欲求や内発的、自律的動機づけを高め、無動機づけを抑制していた（池本・伊藤・杉山，2013）。このことから子どもたちは、指導者との対話的関係を求めていることが示唆される。

子どもの権利条約を順守するためにも、そして持続的な開発を実現するためにも、まずは本研究で明らかになった子どもたちの声を生かしていくことが大人に求められる。子どもの権利条約の基本原則である「子どもの最善の利益を中心」に、子どもの参画のもと、大人と子どもが一緒によりよいスポーツ環境システム作りを行うことが重要であろう。

親が与える子どものスポーツへの態度への影響は意外に大きいことが示されている（Kanters, Bocarro, & Casper, 2008）。Doyle & Burch（2013）は、やってはならない親の態度として他のプレーヤーへの批判、不適切な行為、ネガティブなコメント、指導者やプレーヤーへの怒りなどの11項目を挙げて啓発している。また指導者や親に対しての啓発活動としては、スイスのサッカー協会をはじめとして、日本のスポーツ協会も指針やパンフレットなどを作成している。しかし、子どもの参画なしには、大人主体の啓発活動には限界がある。子ども参画による、よりよいスポーツ環境をどのように根付かせるかが今後の課題となろう。

日本のスポーツ大会は従来トーナメント形式に偏重しており、リーグ戦を中心とするヨーロッパとは異なる（西山，2014）。冒頭に述べたが持続可能な開発目標（SDGs）のスポーツが「平和への寄与、また、健康、教育、社会包摂的目標への貢献と同様、女性や若者、個人やコミュニティの能力強化に寄与すること」の実現を可能にするようなシステムの構築も急務である。

最後になるが、本研究の限界点として、3点挙げておく。1点目は、本調査の有効回答率である。本調査対象者303名の中で、周囲の大人たちへの「やってほしくないこと」を回答した率は36.6%～44.2%であった。半数以上の子どもたちは、周囲の大人たちの現状に満足しており、問題を感じてはいない。すなわち、子どもたちがスポーツを楽しめている環境が確保されているとも解釈できよう。ただし、スクール責任者を通じてアンケートを配布しているため評価懸念が働き社会的に望ましい回答になっていた可能性も否め

ない。

2点目は、今回の調査対象がバスケットボールという一部の種目のみを対象としたことである。バスケットボールの試合は、応援席との距離が近く、親やチームの親集団（応援席）の言動が子どもたちに直接聞こえやすいため、他のスポーツと比較して親やチームの親集団（応援席）の影響が大きいのかかもしれない。藤後他（2019）において小学生チームの指導者255名を対象に指導者のハラスメント行動を野球、サッカー、バレー・バスケットボールについて調査をした結果、指導者のハラスメント行動には種目別、実子の有無の交互作用に有意傾向が示された。最終的に単純主効果では差がみられなかったので大まかな傾向のみであるが、実子なしでは、バレー・バスケットボールの体育館競技での指導者ハラスメントが高く、さらに実子なしが実子ありより指導者ハラスメントが高かったのである。今後はバスケットボールに限定せずに、多くのチームスポーツを調査対象とし、さらにはチームスポーツのみならず、個人スポーツも含めて調査対象を拡大することが期待される。

3点目は、本研究では子どもたちの声を踏まえたジュニア期のスポーツの現状の一部を明らかにしたに過ぎない点であろう。本来であれば、この実態調査をもとに、仮説モデルを作成し、さらに一般化を求めた量的調査へと発展が必要である。

以上3点を今後の研究課題として検討していきたい。

V. 引用文献

- ADVANCE UNEDITED VERSION (2019). https://tbinternet.ohchr.org/Treaties/CRC/Shared%20Documents/JPN/CRC_C_JPN_CO_4-5_33812_E.pdf (2019年6月27日)
- Doyle, D. & Burch, D. D. (2013). *The Encyclopedia of Sports Parenting*. Skyhorse Publishing
- 池本雄基・伊藤豊彦・杉山佳生 (2013). 指導者の支援的行動が中学・高校運動部員のバーンアウト傾向に及ぼす影響 ―自己決定理論からのアプローチ― 島根大学教育学部紀要 (教育科学), 47, 51-60.
- Kanters, M. A., Bocarro, J., & Casper, J. (2008). Supported or pressured? An examination of agreement among parent's and children on parent's role in youth sports. *Journal of sport behavior*, 31, 64-80.
- 子どもの権利条約NGOレポート連絡会議 (2019). 日本の第4回・第5回統合定期報告書に関する総括所見 <https://www26.atwiki.jp/childrights/pages/319.htm> (2020年1月13日)
- 国際広報センター (2016). スポーツと持続可能な開発 (SDGs) https://www.unic.or.jp/news_press/features_backgrounders/18389/ (2019年6月27日)
- 公益財団法人日本ユニセフ協会 (2018). 子どもの権利とスポーツの原則 (第2版) <https://childinsport.jp/?q31cha8921=biurug3mj2lsrtnfol20> (2019年6月27日)
- 文部科学省 (2014). 不登校に関する実態調査～平成18年度不登校生徒に関する追跡調査報告書 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1349956.htm (2019年6月27日)
- 永井洋一 (2013). 少年スポーツ ダメな大人が子供をつぶす! 朝日新聞出版
- 西山哲郎 (2014). 体罰容認論を支えるものを日本の身体教育文化から考える スポーツ社会学研究, 22 (1), 51-60.
- 産経新聞 (2019) 「殺すぞ」卓球部顧問から暴言と記す 茨城中3女子自殺 <https://www.sankei.com/life/news/190506/lif1905060009-n1.html> (2019年6月27日)
- 島沢優子 (2017). 部活があぶない 講談社現代新書
- 信毎Web (2019). 運動部の体罰 暴力と決別する意志を <https://www.shinmai.co.jp/news/nagano/20190525/KT190524ETI090013000.php> (2019年6月27日)
- 日本スポーツ協会 (2019). 少年団都道府県別競技別団員数 https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/R1_todoufukentodaninsu.pdf (2020年1月31日)
- 杉本希映 (2010). 中学生の「居場所環境」と精神的健康との関連の検討 湘北紀要, 31, 49-62.
- スポーツ庁 (2018). 運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/013_index/toushin/icsFiles/afldfile/2018/03/19/1402624_1.pdf (2019年6月27日)
- 藤後悦子・井梅由美子・大橋 恵 (2017). チームのネガティブな人的環境が小学生のスポーツモチベーションに与える影響 モチベーション研究, 6, 17-28.
- 藤後悦子・川田裕次郎・井梅由美子・大橋 恵 (2017). 小学生の地域スポーツにかかわる親のスポーツ・ペアレンティング コミュニティ心理学研究, 21 (1), 80-95.
- 藤後悦子・大橋 恵・井梅由美子 (2017). 子どものスポーツにおけるスポーツ・ハラスメントとは 東京未来大学研究紀要, 12, 63-73.
- 藤後悦子・大橋 恵・井梅由美子 (2018). 中学校の運動部指導者の関わりが部内の人間関係および生徒の精神的状態に与える影響 社会と調査, 20, 55-66.
- 藤後悦子・大橋 恵・井梅 由美子 (2019). 過去のスポーツ体験及び現在の指導・日常生活体験が地域スポーツ指導者のハラスメント行動に与える影響、モチベーション研究, 8, 11-22.
- United Nations (2015). general Assembly https://www.un.org/en/ga/search/view_doc.asp?symbol=A/RES/70/1 (2019年6月27日)
- 本研究はJSPS科研費 (18K03119) の助成を受けたものである。

STUDY EXPECTATIONS OF COACHES, PARENTS, AND PARENT GROUPS (CHEER GROUPS) BY CHILDREN PLAYING BASKETBALL : FOR ACHIEVING SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS (SDGs) AND REALIZING “CHILDREN’S RIGHTS IN SPORTS PRINCIPLES”

TOGO ETSUKO (*Tokyo Future University*)

IUME YUMIKO (*Tokyo Future University*)

OHASHI, M, MEGUMI (*Tokyo Future University*)

“Children’s Rights in Sports Principles” were described by UNICEF and Japan Committee for UNICEF to advocate the significance of a child-centered sports environment in 2018. This study investigated children’s opinions on their human environment that included coaches, parents, and parent groups (cheer groups). Moreover, the content of children’s descriptions was examined to develop a child-centered sports environment. Participants were elementary and junior high school students (n=332) attending private basketball clubs around the Kanto region. The contents of their free descriptions were analyzed using the KJ method and classified into 29 minor categories and 9 middle categories. Children expected the parent groups (cheering groups) to give “mental support” such as warm cheer and “support for smooth team operation.” They expected parents to provide “mental support” and “physical support,” and expected mainly the coaches to give “concrete advice and well-designed training methods” as well as “physical support.” What children did not expect of adults were classified into 41 minor categories and 11 middle categories. These included “being too enthusiastic about the games” and “negative attitudes and behaviors” towards parent groups, “excessive interference” and “negative attitudes and behaviors” towards parents, and “dissatisfaction with training contents” as well as “violent language and violence” towards coaches. The need for a receptive environment that includes warm cheers and an interactive sports environment is discussed based on these results.

Key Words : bench-harassment, sport-parenting, SDGs, Children’s Rights in Sports Principles

—2019.11.20 受稿, 2020.2.17 受理—